

成蹊会誌

1968年5月 第

28 号



目 次

大学院工学研究科の博士課程開設に当って

福田節雄	①
経済学部の発足	
法学部の発足にあたって	
謝恩会に出席して	
梅地先生の思い出	
三浦先生を偲ぶ	
成蹊時代をふりかえって	
生物部 O・B から	
私の抱負	
欧州の心身障害者施設	
成蹊会近況	
成蹊学園近況	
物故会員	
成蹊会会費・寄付金芳名録	
編集後記	
福田節雄	②
関島久雄	③
石井照久	④
富田馨吾	⑤
竿代靖	⑥
青葉翰於	⑦
村川堅太郎	⑧
山田充	⑨
瀬木庸介	⑩
川口博文	⑪
	⑫
	⑬
	⑭
	⑮
	⑯
	⑰
	⑱
	⑲
	⑳
	㉑
	㉒
	㉓
	㉔
	㉕

表紙写真 若葉美しい成蹊学園の櫟並木

大学院工学研究科の博士課程開設に当って

工学研究科長 福田節雄



成蹊学園の大学院工学研究科は昭和四十一年四月に修士課程を以て発足しましたが、この三月末に第一回の修士卒業生十二名を送り出すとともに四月一日からさらに博士課程を増設できることになりました。これで、当工学研究科は修士課程と博士課程とを具えての完成状態となったわけであります。今後はこれらの課程を卒業する学生に工学博士の学位を与えることができるだけでなく、社会で活動中の方で論文を提出しその審査に合格し併せて学力試験にも合格した方には同じ工学博士の学位を差上げることになりました。

大学院とくにその工学研究科に対する社会の認識あるいは期待も最近になってようやく本格的になってきたと思います。最近のように科学技術の発達が急激になってきますとくに産業技術の先端を受け持つような技術者としては大学の学部を卒業しただけでは事足りなくてどうしても学部卒業後さらに二年あるいは五年の大学院課程を卒業した人が要求されるのであります。今後は年とともに工学教育の重心が逐次に学部から大学院へと移ってゆくであろうことは疑のないことであります。このような情勢下では少くとも工学部修業年限はこれを現在の四年から五年さらには六年に延長すべである

という意見も少くありませんが、それよりも現在の大学院の修士課程を充実して学部四年、修士二年、計六年の課程を以てこれに代える方が良いという意見も多いのであります。いずれにしても工学の最高段階の教育をその教養的な教育をも含めて四年で果そうとするのはこれからの時勢には無理であるということには両意見とも変わりはないのであります。したがって各大学とも工学研究科をおきまたそれを充実して来たるべき時勢に備えようとするのは無理からぬこととであります。また、工学研究科の無い大学は人並みのレベルの大学ではないという社会的な気分が出るのもまた無理からぬことです。しかし、いやしくも大学院がある以上それは名ばかりのものであっては正に羊頭をかかえて狗肉を売るの類であります。簡単にいって、例えば博士課程の指導教授は学部の先生の先生であるような人でなければなりません。その指導教授の方々の研究は正に工学界や産業界を指導するレベルのものでなければなりません。研究教育の設備も非常に高度なものでなくてはなりません。それがそれにも増して教員の質レベルが高いことがもっとも大切であります。大学院設置に当ってはその教員の個人審査が各専門グループによって厳重に審査されるのは当然のこととあります。

幸にして成蹊大学の工学部はその設置の当初から工学研究科の博士課程の設置までを計画に入れて専任教員を備えましたので、極めて順調に修士課程さらに博士課程を、当初の教員組織にほとんど手を触れないで、開設することができました。他方、これには学園当局が工学部の設備の充実と十分の配慮を致されたことも与って力があったことを忘れることもできないと思います。お蔭で、今般の博

士課程は、電気工学、工業化学および機械工学の三専攻課程とも指導教授七人ずつさらにそれに授業担当の助教授二、三人づつをもつという非常に秀れた教員組織を以て発足しております。工学研究科には各専攻課程ごと最低四人の指導教授をもつことが国の基準となっておりませんが、この基準に対しては非常な余裕がありそれだけに各専攻課程の包含する専門分野は広い次第であります。当工学研究科はその入学学生の資格も厳しくしており、例えば修士課程に進学する学生は学部在学中の成績はそのクラスの少くとも三分の一以内の順位にあり、しかも入学試験にも合格しなければなりません。例えばこの三月に修士の学位を取って卒業した十二名は粒揃いの学生でありますし、この四月に博士課程に入学した二名はいずれも学部在学成績が抜群の学生であります。上のような次第でありますから、そう遠くない間に、当大学院は一流中の一流のものであることが世間からも認められ当学園としても誇りにできるものとなることを確信しております。

経済学部の発足



経済学部長 関島久雄

昭和二十四年に成蹊大学が開設され、そこに設けられたのが政治経済学部であった。当時、新制大学を開設するにあたって、まず考えられることは、旧制高校の文科と理科とを大学に移行すること

くない。むしろ、二学部にすることが望ましいとのことであった。そこで、長い歴史を有する政治経済学部を解消することには多少の未練があったのであるが、最近の学問の発展をも考慮して、経済学部と法学部との二学部に発展的解消することにしたのである。そして経済学部、法学部の一年生の募集は今年が最初であるが、すでに在学していた学生も、二年、三年は各学部に分けて、四年生だけを政治経済学部として残すことになったのである。したがって、今年一年でもって政治経済学部は終ることになるのである。満二十年になる。このことを考えて計画したわけではないが、たまたまこういうことになるのである。

考えてみると、政治経済学部という一本の幹から、まず工学部が生れ（医歯学進学課程を廃止して）、さらに、文学部が生れ（教養コースを廃止して）、さらにまた法学部が生れたのである。そして、経済学部は政治経済学部を引きつぐことになり、従来の伝統を守るとともに、新しい学問の発展にかんがみて、時代に即応する学部として面目を一新して、新しい出発をはじめたのである。古い卒業生からみると、学科目が全くかわっているし、教師陣も新しいメンバーが多く加わっている。それをみていただければ、経済学部がどんなに充実した学部になったか、さらに政治経済学部が成長し、成蹊大学が、ますます発展、充実してきたかをみていただけると思

う。

あった。成蹊大学を開設するにあってもまずそのことが考えられ、文科を経済学部、理科を工学部に改組する案がたてられたが、工学部の開設はむりということになり、経済学部も、計画を変更して政治経済学部という複合学部として出発することになった。工学部開設の準備として、ある程度機械類や図書を買いこんだ。しかし工学部が開設されないことになって、そのかわり、当時の新しい制度として、医歯学進学コース（二年）を政治経済学部に移した。

また新制中学、高校が男女共学制をとる結果、女子の進学のための女子の短期大学を開設する計画もあった。

とにかく、成蹊大学は、まず政治経済学部をもって発足したのである。しかも初年度に、一年次生と二年次生との両方の学年の学生をもって出発したのである。それから今年で満二十年になるのである。その間、大学、とくに政治経済学部の発展、拡張についていろいろ考えられた。比較的早い時期に法学部を新設することが、ほばきまっていたようなこともあった。しかしそれはなかなか実現しなかった。それより、政治経済学部の方をいろいろ工夫した。まず政治経済学部にいるいろいろのコースを設けた。そしてその一つの教養コースをもうけたところ、いつもの年の三倍位の女子学生が入学してきた。約五十名の女子学生が加わるようになった。教職課程もおかれた。

しかしコースだけでは満足できず、学科に分けることとなり、まず政治学科と経済学科とを設けたのが四十年であった。さらにその翌年法律学科と経営学科とを設けようとしたところ、文部省の見解として、政治学部のような複合学部は四学科を設けることは好まし

法学部の発足にあたって

法学部長 石井照久



□成蹊大学にも、ようやく法学部が新設され、この四月から発足することになった。成蹊大学関係者の多年にわたる宿望が実現され、誠に喜ばしい限りである。わが国には、大学の数は多いが、特色のある大学は必ずしも多くはない。こ

れは新設される大学ないし学部が、既存の国立大学または私立大学の型に追随しがちだからである。国立大学の場合には、このことはある程度やむをえないことであるにしても、私立大学の場合には、諸外国の例が示すように、もっと個性的であるべきである。そうしてこそ、正しい意味における研究と教育の社会的分業のもとに、それぞれの「持ち味」を生かしながら、国民の智的水準の向上と福祉の増進を実現することになるからである。

□成蹊大学の法学部は、第一に、小学校から大学にいたるまでの全課程を含む成蹊学園のうちにある一学部である。したがって、この特色を十分に発揮すべきである。いわゆる「一貫教育」の真義をふまえて、教授と学生、さらに父兄および先輩が一体となって、その理想に一步一步近づいていかなければならない。優秀な学生が、成蹊学園のうちから、数多く法学部に入学してもらいたいと念願している。そして法学部は、その受け入れのため、勝れた教授たちと独

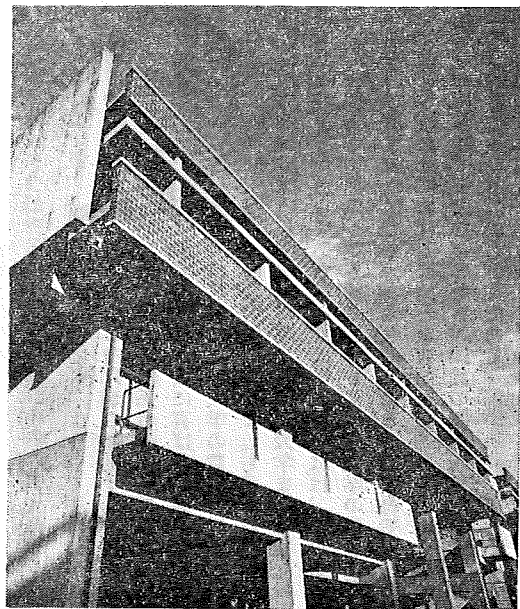
特の教育課程を準備しているが、今後とも、常に反省を加え、その充実改善をなしていきたいと考えている。

□第二に、法学部は、成蹊大学の、従来の良き伝統である「少数教育」の方針と「教授と学生との密接な連絡」ということを、近代的方法と感覚のもとに、よりいっそう徹底させていき、ここに他の多くの大学においては、とうてい期待しない長所を伸ばしていきたい。少数の学生による演習などのほか、見学・小集会・旅行その他の文化活動の場を通して、教授と学生との「対話」をできるだけ多くし、学生諸君の文化ないし社会的関心と欲求を満足させていくものである。それだけに、学生諸君も、積極的に、教授たちと接触されることを希望してやまない。よくいわれるように「討議をつづ」(Through discussion)によって、ものごとが、民主的に、また、秩序を保って運営されていくという、民主主義のルールは、なによりもまず、学園のうちに確立されなければならない。そしてそれが正に研究と教育についての、「大学の自治」を守るゆえんでもある。

□第三に、法学部は、成蹊大学の、四つの学部の一つであることの意義と特色を十分に生かしていきたい。大学が、それぞれの学部に分かれるということは、近代的な大学としては一般的な方向でありまた、それ自体としては、科学の進歩に対応する適切な在り方といえる。しかし、そのことによって、研究や教育の面において、或いは大学の行政の面において、つまらないセクショナリズムを醸成するような弊に陥ってはならない。分化と総合とを調和させることに、大学の発展の基盤があるが、それを実現するには、成蹊大学

は、誠に格好なものである。適正規模の大学として、その特色と良さを十分に発揮していくことを心から期待してやまない。

大学法・経研究室



謝恩会に出席して

特別会員 富田 馨吾

昨年十一月三日文化のよい日に成蹊小学校の同窓会が開かれましたその席上、谷岡氏の御尽力で私の顕彰会を併せて催していただき、丹羽先生始め当時の先輩、友人の大久保、西原、香取、斎藤、山本、村上先生や、小学校の諸先生、卒業生の皆様と数年或は数十年振りに会した時は何だか自分が昔の成蹊時代の生活に吸い込まれて何ともいえぬ親しみとなつたさに打たれました。思い出すと私が成蹊へ赴任いたしましたのは大正も末期の十五年四月で、本館と雨天体操場、食堂が完成して理科館は二階迄コンクリートが打ち込まれた未完成のもので本館で小学校から高等学校までの授業が行われていました。当時の校長は浅野孝之先生で上原先生が主事で私は両先生のテストを受けて採用していただきました。この両先生も今は故人となつておられることは残念です。私が最初に与えられた教室は本館の突き当りの大部屋で図画の大沼先生と二人で中央を衝立てで仕切って授業をして

いましたが、工作が喧しいので図画は他へ引越されたので、あ的大部屋を一人で占領して授業を進めておりました。昭和六年に学制が改革せられ高等学校尋常科に工作を課することとなったので、理科館の裏に新しく新築していただきました。これが戦後迄使用せられていたようです。成蹊時代は私の一生にとつ



て最も思い出の深い時代で自分としても人間の一生の壮年時代であるし、また自分の学科としても手工から工作に名称を変更するに当たっても当局と交渉に当るなど校内は勿論校外活動にも思い出の深い時代でありました。それに成蹊の生活が、家族的で職員間は兄弟以上、生徒諸君とは親子以上の親しみをもち、毎朝

の凝念、月々の遠足、乃木祭、断食会、夏の箱根、房州の海水浴と、まるで走馬燈の様に一年一年を夢の間に過しました。

十七年末家庭の都合上帰国せねばならぬ運命に到りました時は、何だか淋しく残念に思いましたが、後任の木村連先生が引受けて下ったので許された次第です。木村先生も私と同様帰国して同じ三重大に勤め、また現在四月から同じに勤めているのですが、運命というものは不可思議なものです。

敗戦の結果国情も学制も変りましたが、現在も成蹊は変ることなく、より以上の発展をとげられ、工作も藤浦、石井、太田、讀谷山の先生と引き継がれてより以上発展していただいていることは初めて聞いた私として感激に堪えません。厚くお礼申します。どうか学園全体がますます御発展せられんことをお祈り申します。

申し遅れましたが皆様から多大の記念品料をいただき御親切の程、厚く厚くお礼申し上げます。まだまだ元気でございますので、あはれ屋ではございますが、伊勢路へお出掛けの時はぜひお知らせ下さい。お願い申し上げます。

(元成蹊小・中学校教諭)